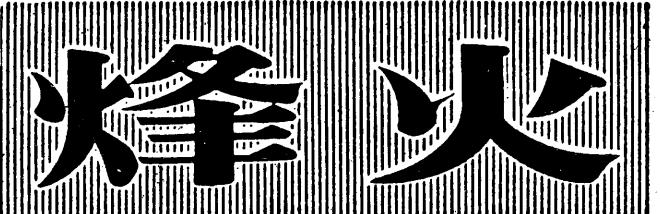


<b>今号の内容</b> <b>社会主義連合を批判する</b> .....P2~5 ◉仏大統領選が示したもの .....P6~7 ◉韓国総選挙と新しい政局 .....P8 ◉フィリピン連帯學習資料③ .....P10~11 ◉(寄稿)洛南合労結成5周年 .....P12~14	1988年 6月1日 第395号 編集発行人 高木一夫 一部 200円		<b>共産主義者同盟（全国委員会）</b> ■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄西2-8-19 明豊ビル401号 大労協内 TEL.(06)371-3706 ○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫 ○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫
--	---	---	--

6月

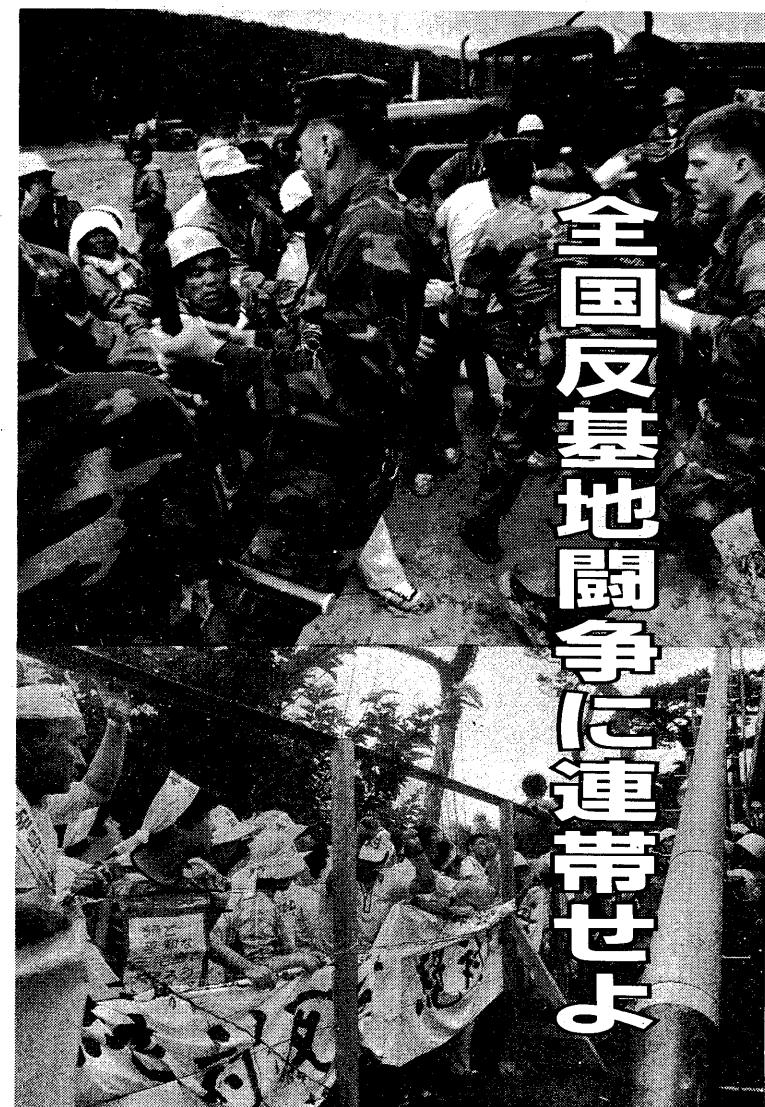
# 安保闘争の高揚を

## 労働者政治闘争の再建が必要

しかし、主体の側の状況はきわめて厳しい。帝国主義的労戦統一が進行し、八九年秋には官民からなる右翼ナショナルセンターが結成されようとする情勢のなかで、かつて総評がまがりなりにも保持してきた労働者の大衆的政治闘争の場は消滅しつつある。労働者大衆が政治闘争に関わっていく機会や契機は大幅に縮小しつつある。労働運動から赤旗や労働歌やデモが追放されるとともに、戦後の労働者政治闘争の伝統もまた葬り去られようとしている。

このような現状を打破し、労働者政治闘争を再建していくことは緊要の課題である。労働者大衆の政治的覚醒をうながし、日本帝国主義の侵略反革命戦争への乗りだしに正面から対決する反安保・国際連帯を掲げた政治闘争を組織せねばならない。

フィリピン・ニカラグアを先頭にした共産主義の新しい胎動と連帯・結合し、六月安保闘争の高揚をつくりだそう。



上▶米軍のハリアー訓練場建設反対に立つ住民（沖縄・87年1月）  
 下▶三宅島では夜間離発着訓練基地反対のたたかいが（87年7月）

## ■社会主義連合を批判する

# 時代はわれわれ共産主義者に何を要求しているか

「社会主義連合」という新しい組織を結成しようという動きが、一定の注目を集めている。それはいったい何を背景にして生まれ、何をめざし、現在の階級情勢のなかでどのような役割を果たそうとするものなのか。これらの点を明らかにするために、われわれはその中心党派の一つである共産主義労働者党（共労党）の主張をとりあげ、評価と批判を試みたい。

### どのような道を進んではならないのか

日本帝国主義は、一九八六年から八七年にかけて直面した深刻な「円高不況」を乗りきり、国際帝国主義としての飛躍の道をつき進んでいく。

この過程で、日帝は他国への資本投下を本格的に開始し、新植民地主義支配の網の目を全世界に急速に拡大した。すでに百万人を越える他の労働者が、日帝によって直接的に搾取・収奪されている。そして、日帝が他国への株式投資、債権投資、不動産投資など直接的生産以外から八六年に収奪した富は、実に五六七億ドルにのぼり、数年のうちに貿易黒字を上回ると予測されている。

日帝はこの強力になった経済力を背景にして、国際帝国主義共通戦略の推進者として、ますます全世界の階級闘争の、とりわけ反帝民族解放・社会主義革命の敵対者として登場しようとしている。フィリピン革命の虐殺にむけた百億ドル経済援助にあたって、日帝が中心的役割を果たそうとしているのはその端的なあらわれである。そして国内では日帝は、侵略反革命戦争出動にむけた全面的な攻撃を労働者人民にうちおろしている。

このなかで、いよいよ帝国主義的労戦統一が最終的に完成化されんとしている。来年秋には総評が解散し、右派ナショナルセンターが発足

いる。

### 開始された新左翼の再編

このような日帝の新たな攻勢と戦後階級闘争構造の崩壊は、新左翼諸党派のなかに、さまざまに再編の動きを呼び起こし始めている。それは不可避であったといえる。

かつてのわれわれをも含めて、わが国における新左翼諸党派は、社共・総評の存在を前提として、彼らとの暗黙の分業の上に前衛党的建設を展望するという根本的な限界を内包してきた。すなわち、労働者の大衆的組織化は総評にゆだね、右翼日和見主義諸党派は組合内反対派活動と資本主義への経済主義的批判の啓蒙運動をもつて、急進民主主義諸党派は労働者階級本隊の組織化から乖離した戦闘主義テロリズムに転落することをもって、自然発生する少數の反社会の労働者学生活動家のみを対象とした党建設を展望してきた。

だが、帝国主義的労戦統一の完成化は、いかなる意味でもこのような社共・総評との分業が成立しない時代の始まりを告げた。新左翼諸党派はこのなかで、階級闘争全体に責任を負う前衛党への抜本的な飛躍に直面しているといえる。誰がそのための準備をもっているのか、どのような道へと進むべきなのか、このことが自覚していくようといまいと、すべての新左翼諸党派に厳しく問われているのである。

このようななかで、白川真澄氏（共産主義労働者党）、朝日健太郎氏（フロンント）、常岡雅雄氏（人民の力派）ら八名の連名によって「社会主義連合」の結成がこのかん呼びかけられた。いまだ個人の文責によるいくつかの文書を除けば、公式にはごく簡単な呼びかけ状が公表されているだけであり、その内容ははつきり

# の崩壊をみすえ 線の建設いそぐ

していない。伝え聞くところによれば、「社会主義連合」の性格規定に関して、それが党の建設を展望するものなのか、統一戦線なのか、そのいずれでもないのか、という根本的な点をめぐってすらまだはつきりとした一致がないようである。

しかし、共労党の機関紙「統一」（八八年新号）に掲載された「新たな人民的政治勢力を建設しよう」という提起が、「社会主義連合」の呼びかけに至るひとつのインパクトになつたことは、容易に推測できることがある。われわれはこの共労党の提起に関しては、深い批判と危惧をもつている。そして共労党のこの提起が「社会主義連合」の形成に向けた動きのなかで、少なくとも一つの軸になつてゐるがゆえに、えて彼らの提起をとりあげてわれわれの批判を提起しようと思う。なぜならば、この共労党の共産主義党がどのような道を進んではならないのかを鮮やかに示すものであると考えるからである。

## 共労党の提起の基本骨子

共労党の提起の骨子は、次のものである。

(1)彼らはまず「新たな人民的政治勢力」の必要性を、次のように提起する。

「全民労連が発足し、社会党・総評ブロックが最終的に変質し解体する中で、政党・政治勢力は『保守・中道の大連合』の完成にむかって再編されつつある。……しかし、この時代に、ふさわしい、まとまりのある政治表現は、空白である。…日本国家の支配の全体と対決できる、力強い全国的政治勢力が不在である。……だから、われわれは、新しい人民的政治勢力を形成することが、ここ数年間の最も重要な戦略課題である」と提起する。…そのことは、われわれが長らく身につけてきた左翼反対派の発想から脱却し、日本の階級闘争全体に直接に責任を負う態度と、人民闘争の全体を設計する能力を獲得することにほかならない」

(2)そしてこの「人民的政治勢力」が掲げるべき「人民綱領」を、「日本社会を根本から変革するもの」として次のように提起する。

「新しい人民的政治勢力は、少なくともアジア民衆との国際連帯、人民の自治・自立・自己決定、エコロジー、反差別・反競争の連帯と平和等を対抗原理として、抑圧的で腐朽した日本資本主義に代わる解放社会像を対置する」

(3)さらにこの政治勢力が立脚する基盤を、次のようにいふ。

「この新しい政治勢力は、今や既存の政党や労働組合はもちろんのこと、資本・企業によつても掌握されない流動的で「浮遊」する多くの民衆に深く依拠し、急増するそれらの人々の政

との連合として展望しうる」。「われわれにいま、緊急に問われている課題は、この「赤」と「緑」の連合を具体的に実現するためにもます、

「赤」の政治連合をつくりあげ、独自の闘いを发展させることである」。「そのための不可欠な活動の骨格は何か。第一に、革命と社会主義の旗を、その中身を根本的につくりかえしながら、真正面にかかげることである。…第二に、マルクス主義と革命的左翼の政治潮流が陥っている主体的危機を自覚し、その克服のための共同作業として「政治連合」の形成を進める」とある。第三に、「赤」の政治連合は、真に大衆的な支持と社会的信頼をそなえた人民的政治勢力を登場させるために、「緑」の潮流と連合し、また総評・社会党ブロックの解体の中からそれに抗して独立してくる戦闘的・自立的潮流と連合しなければならない」。

(4)そして「新しい人民的政治勢力を形成する事業」として、次の二つの課題を提起している。

「第一に、われわれは、八九年参院選において、新しい人民的政治勢力が登場し、「保守・中道の大連合」体制に風穴をあける戦略的な闘争として、勝利しなければならない。第二に、…労働運動の場において「新左翼」の政治潮流が、社会党左派の潮流、さらに統一労組懇の潮流と政治潮流および戦闘的・自立的な労働運動の潮流と、「緑」つまり自治とエコロジーをめざす地域住民闘争、生活の質をかえる運動、反差別闘争、女性解放闘争など「新しい社会運動」ものではない。

すでに述べたように、戦後階級闘争構造の崩壊のなかで、共労党が「左派反対派の発想から脱却」を掲げることには根拠がある。だが、彼らの「新たな人民的政治勢力」の建設といふ提起は、階級闘争の前進にいささかも結びつくものではない。

## 共労党「人民的政治勢力」論のあやまち

# 戦後階級闘争構造 大衆的政治統一戦

政治的自己表現として形成されねばならない」。

「この革命を担う人民主体の基本的性格は、…『赤』、つまり・国家打倒と社会主義をめざす

政治潮流および戦闘的・自立的な労働運動の潮流と、「緑」つまり自治とエコロジーをめざす地域住民闘争、生活の質をかえる運動、反差別闘争、女性解放闘争など「新しい社会運動」

すでに述べたように、戦後階級闘争構造の崩壊のなかで、共労党が「左派反対派の発想から脱却」を掲げることには根拠がある。だが、彼らの「新たな人民的政治勢力」の建設といふ提起は、階級闘争の前進にいささかも結びつくものではない。

彼らの提起に対するわれわれの批判の第一は、左翼諸党派が共通の努力をもって創出しなければならないのは、何よりも労働者の大衆的な政治闘争への決起の戦場となる大衆的プロレタリア政治統一戦線であって、新たな議会主義政治勢力の建設では決してないということにある。

来年秋に発足する右派ナショナルセンターは、いずれ産業報国会としての本性をあらわしていくであろう。それは、帝国主義間競争の激化を背景に、わが国労働者のなかから自然発生する帝国主義的排外主義に立脚し、日帝の侵略反革命戦争出動準備との闘争へと組織することなしに、日帝ブルジョアジーと労働貴族どもの攻勢とたたかることはできない。そして、右派ナショナルセンターの内外と外に分断されざるをえない労働者を結びつけることができるとは、経済闘争ではなく政治闘争以外にはありえない。

戦後階級闘争構造の崩壊は、労働者の大衆的政治決起を著しく困難にしてきた。総評労働運動の枠内のものではあれ、もつとも基礎的な労働者の階級的決起の構造であった地評・地区労が崩壊し、「反戦・平和政治闘争」の枠内の中のではあれ存在した労働者の大衆的政治決起の場が急速に崩壊してきた。帝国主義的労戦統一が、階級闘争の今後にとってもたらした最大の困難はここにある。

この事態が顕在化し始めた七〇年代末以降、

労働者が労働運動から離れ、一市民や一住民といふ立場から政治闘争に参加していくという傾向が急速に拡大していった。そして、安保・基地強化との闘争や国家秘密法粉碎闘争など、労働者階級が自らの課題として掲げねばならない問題とされた労働者の全国的政治統一行動を可能とする全国的政治統一戦線の建設を提起しつづけてきた。「左派反対派の発想からの脱却」を掲げるのであれば、それは何よりもまず、労働者の階級的決起の構造を、なかでも大衆的政治決起の構造を、右派ナショナルセンター支配下の一時代の困難な状況に耐えうる恒常的なものとして創出することにむけられねばならないのではないか。戦後階級闘争構造の崩壊に直面し、新左翼諸党派が共通の努力を集中すべきは、まずここにあるのではないのか。そして、この大衆的プロレタリア政治統一戦線のもとに、さまざまな市民運動、住民運動を結合させていくことにあるのではないのか。

「社会主義連合」が、これをみずから主張して掲げるのであれば、階級闘争の発展に積極的な貢献をなしうる可能性もあったであろう。だが、共労党の提起においては、「新しい人民的政治勢力を形成する事業は当面次のような課題に取り組まねばならない」として、「八九年参議院選挙」と「たたかうナショナルセンター、ローカルセンターの形成」がふれられているのみで、政治的統一戦線の形成の問題は見事に欠落している。それは、「社会主義連合」相談会の呼びかけ状においても、まったく同じである。

われわれもまた、これまで一貫して地方労組連合の建設を提起し、可能性があるかぎり左派ナショナルセンターの建設を追求していくべきことを提起してきた。しかし、これらの労組連合建設の努力は、各地方ごとの、そして全国的な政治的統一戦線の形成と結合しないならば、右派ナショナルセンターには参加しない労働組合の生き残り戦術とどまり、階級闘争の将来にむけて積極的な役割を果たすことはできない。われわれは共労党が、そして「社会主義連合」が、この階級闘争の将来にとってぜひとも必要な困難な課題を回避し、「人民的政治勢力」という不定型であいまいな、それゆえ労働者の階級的決起を保障するものとは決してなりえない集合体の形成へと問題をすりかえていると考えざるを得ない。

それでは、この集合体は、実践的にはどのよう性格をもつものとなるのだろうか。共労党は、ナショナルセンター、ローカルセンターの形成をあげているが、この面で彼らが積極的役

をはたしつる条件をもっているとは、いささかも考えられない。他方で共労党は、「政治勢力が具体的な『闘い』の姿をとって形成されることが不可欠である」として、そのための決定的に重要なたたかいとして八九年の参議院選を提起している。共労党が提起する不定型な集合体は、実際的には議会選挙のための集合体としてその姿をとる以外にはない。われわれは、議会内左派であった社共構造が崩壊した後にすへりこみ、新たな議会主義政治勢力の形成へと彼らがいきつくと予測せざるをえない。

われわれは共労党がこのような誤りに陥ることには、根柢があると考えている。彼らは、労働者が労働運動から遊離し、市民や住民という立場からさまざまな運動に参加していくという事態を否定的なものとはとらえずに、むしろ積極的に肯定してきた。そして、いまや「既存の政党や労組にも企業にも掌握されない『浮遊する民衆』に依拠すると主張するに至っている。このような彼らが、労働者の階級的決起の構造を、とりわけ政治決起の構造を創出していくのではなく、これらの市民運動・住民運動を「新しい社会運動」と賛美し、これに依拠した「人民的政治勢力」なるものの形成を唱えても、何ら驚くにはあたらない。

それでは、彼らは「人民的政治勢力」の提起をもって、わが国の階級闘争をどこへと導こうとしているのか。政治基調の面において、そして彼らが力説する「社会主義の再生」という点について次に見ていく。

## 「国際化」への一面的批判

彼らの提起に対するわれわれの批判の第一は、彼らが国際主義をもつて労働者人民の抵抗闘争を領導するのではなく、「国際化」と対決する政治勢力」の形成を主張している点にある。

共労党が提起する「人民的政治勢力」の政治基調的内容は、「『国際化』に抵抗する民衆の胎動と結びつき、人民の政治勢力を全力で形成しよう」（「統一」三〇六号巻頭スローガン）という呼びかけに表現されていると見て、まず間違いないであろう。彼らは、日本の民衆に矛盾と犠牲をおしつけて、日帝が他の帝国主義との「国際協調路線」を進めていくと批判する。たとえば、ドル急落＝円高による失業の増大、農産物輸入自由化の受け入れによる農業の切り捨て、内需拡大政策による土地騰貴、軍事費やODA援助増額要求の受け入れによる大型間接税導入などである。彼らは、これに抵抗する民衆の政治的自己表現として「『国際化』と対決する政治勢力」を登場させ、「抑圧的で腐朽した日本資本主義にかわる解放社会」をつくるというのである。

日帝は、いま、国際帝国主義としての抜本的飛躍にむかっている。日帝は、他国への資本投

割をはたしつる条件をもっているとは、いささかも考えられない。他方で共労党は、「政治勢力が具体的な『闘い』の姿をとって形成されることが不可欠である」として、そのための決定的に重要なたたかいとして八九年の参議院選を提起している。共労党が提起する不定型な集合体は、実際的には議会選挙のための集合体としてその姿をとる以外にはない。われわれは、議会内左派であった社共構造が崩壊した後にすへりこみ、新たな議会主義政治勢力の形成へと彼らがいきつくと予測せざるをえない。

この事態に対しても共産主義党がまず提起すべきことは、反帝民族解放・社会主義革命との国際主義的連帯にかけて、自国帝国主義の打倒が日本労働者人民のいよいよ重大な任務となつたということではないのか。共労党のごく、日帝の「国際化」をもっぱら日本の民衆に矛盾をもつとも過酷な階級闘争の弾圧者として登場しているのである。日帝の「国際化」とは、まさにこのことにほかならない。

この事態に対する共産主義党がまず提起すべきことは、反帝民族解放・社会主義革命との国際主義的連帯にかけて、自国帝国主義の打倒が日本労働者人民のいよいよ重大な任務となつたということではないのか。共労党のごく、日帝の「国際化」をもっぱら日本の民衆に矛盾をもつとも過酷な階級闘争の弾圧者として登場しているのである。日帝の「国際化」とは、まさにこのことにほかならない。

この事態に対する共産主義党がまず提起すべきことは、反帝民族解放・社会主義革命との国際主義的連帯にかけて、自国帝国主義の打倒が日本労働者人民のいよいよ重大な任務となつたということではないのか。共労党のごく、日帝の「国際化」をもっぱら日本の民衆に矛盾をもつとも過酷な階級闘争の弾圧者として登場しているのである。日帝の「国際化」とは、まさにこのことにほかならない。

たしかに国際帝国主義として飛躍せんとする日帝は、国内において労働者階級の上層と下層への分裂を拡大し、労働者人民のさまざまな憤激と抵抗を生みだしている。

しかし、この新たな時代は、帝国主義間抗争の激化を背景にして、労働者人民のなかから帝國主義的排外主義が自然発生する時代である。それは、帝國主義超過利潤にもとづくこれまでの生活を保守せんとして、企業防衛から日帝の海外権益の防衛を要求し、ついには侵略反革命戦争出動する支持することにいきつくるものである。この帝國主義的排外主義は、上層労働者のなかからのみ発生するのではなく、放置しておけば下層労働者や他の被抑圧諸階級層をもたらえていく。

共労党はこの新たな時代が、膨大な帝國主義的排外主義が自然発生する時代であることをまったくとらえていない。「自民党政権は、『国際協調』を推進する以外に延命の道はないが、しかしそれが引き起こす矛盾を民衆に押しつけては自らの政治的基盤を失う」という支配のジレンマの中にある」と現状を把握する彼らは、帝國主義的排外主義が日帝の延命戦略の強力な支柱として人民をとらえ始めていることを、およそ対象化できないようである。

彼らの「『国際化』に対決する政治勢力」という提起は、このような帝國主義的排外主義に對して、まさに労働者人民を無防備に放置し、とりかえしのつかない敗北を準備しかねないものである。共労党の諸君は気づかないのであろうか。失業と将来生活への不安から憤激を強める労働者の少なくない部分が、同時にアジア人出稼ぎ労働者の排斥を要求していることを。農

産物自由化に反対する農民のなかで、米帝に対する排外主義的憎悪をともなって、日帝は米帝から日本の農業を守れという要求が強まっていることを。日帝の「国際化」によって矛盾と犠牲を集中される労働者人民のなかでは、「国際化」に反対するということは、容易に帝国主義人民に対する排外主義的憎悪と結びついていくことを、共労党の諸君は知らねばならない。

それゆえ、この新しい時代において共産主義党が要請していることは、共労党のひとくじで帝の国際帝国主義としての飛躍が生みだす労働者人民の憤慨や抵抗にそのまま立脚し、その自然発生的要求をまとめたものに過ぎない「『国際化』に対する政治勢力」を形成することでは断じてない。共産主義党が要請されていることは、あらゆる労働者人民の憤慨と抵抗闘争と批判的に結合し、国際主義をもって領導することにほかならない。労働者人民を実際的で具体的な国際連帶行動に組織し、労働者人民の大衆的政治決起を国際主義をもって領導することによつて、帝国主義的排外主義へと組織されいく労働者人民を、日帝の打倒にむけた日帝との正面戦へと組織していくことである。

共労党のこのような主張は、決して珍しいものではない。国際帝国主義として飛躍する日帝を、もっぱら日本労働者人民の擁護といふ観点からのみ批判し、他の帝国主義とりわけ米帝に対して日帝の利益の擁護を主張する部分は、日共を筆頭として数多く存在している。現代過渡期世界において、日帝を含む帝国主義諸国は、帝国主義間抗争の推進を国際帝国主義統体の延命のための共通戦略の実行に従属させねばならなくなっている。このもとで、自国の労働者人民の利益を擁護せんとして、帝国主義間抗争における日帝の利益の擁護へと転落する部分が生まれることは充分に根拠のあることである。われわれは、共労党の諸君が、先達である日共と同じ誤りへと陥らないことを願うのみである。

## M-L主義放棄の社会主義

彼らの提起に対する批判の第三は、「革命と社会主義のつくりかえ」として彼らが提起している点に関してである。

われわれは、わが国を含む帝国主義本國において、共産主義への絶望が広範にまん延したことに対して、深い危機感をもつてきた。だからこそ八七年初頭以来、「共産主義を人民の希望として復権せよ!」と呼びかけてきた。そしてこの面における努力を、次の二つの課題を中心にしておこなうことを提起してきた。

(a) 労働者人民の現実世界への批判をとおして共産主義を、展望すべき新しい世界の希望とし

て明らかにすることである。日本帝国主義足下の労働者は、帝国主義本国の労働者として経済的には豊かになつたとしても、資本主義のもとでは解決しようのない矛盾に日々ぶつかり、苦悩や、やり場のないきどおりにさいなまれてゐる。共産主義者こそがこれを発見し、資本主義への原則的な批判へと発展させ、共産主義に決されることを提起しなければならない。

(b) 中一国社会主義路線の破壊に対する批判を新たに確立し、現代過渡期世界における国際共産主義運動の再建にむけた努力を全力で組織することである。フィリピンをはじめとする反帝民族解放・社会主義革命は、もはやソ連、中国に共産主義の希望を見ようとせず、新たな実際的国際主義と国際共産主義運動の再建を希求している。われわれは共産主義者の国際連帶を発展させつつ、新たなインターーの創建にむけた努力を強めていかなければならない。

共労党の提起は、「共産主義の希望の復権」という立場から見たとき、積極的な提起たりえるものなのだろうか。共労党のこの領域に関する主張はきわめて断片的であるが、およそ次の点に主な主張があるのである。「世界の危機を解決し社会を再組織するための『もうひとつの』原理、人民のオルタナティブを対置すべき時である」「現代日本における解放としての革命は、……アジア人民と共に生き、自治・自立・自己決定、エコロジー、反差別・反競争の連帯と平等という原理に貫かれた社会を形成する革命として構想されねばならない」。われわれは、このような主張が共産主義の復権につながるとは断じて考えない。

なぜなら彼らのこのような提起の目的は、労働者階級のなかにおける共産主義への絶望を克服し、国際共産主義運動の再建を実現するとい

すべての労働者人民諸君! 共労党の提起のもう誤りは、すでに明らかである。しかしあれわれは、現在「社会主義連合」の形成に何らかの形で関わっている党派や個人が、「社会主義連合」の提唱党派の一つである共労党と同じ見解に立っているとはもちろん考えていい。われわれはそれらの諸君をも含めて、わが国階級闘争の前進のための共同の闘争を組織していく必要があると考えている。

それはこの共労党批判のなかにおいても提起してきたことではあるが、次のことである。第一に、労働者階級の階級的決起の新たな構造を構築すること、とりわけ大衆的政治決起を保障する大衆的プロレタリア政治統一戦線を建設することである。右派ナショナルセンターの

## 階級的決起の新たな構造を構築しよう

成立以降のわが国階級闘争にとって、これがもつ位置は決定的に重要となる。

第二に、労働者の国際連帶闘争を発展させることである。日帝の侵略反革命戦争出動準備が本格化し、帝国主義的排外主義が自然発生する新たな時代においては、国際主義の実践なくして階級闘争のいささかの前進をも切り開くことはできない。

われわれは、これらのたたかいとともに発展させつつ、みずからを社共にかわる前衛党へと建設し、武装せる革命の伝導路=労働者政治委員会を全国の職場・学園、あらゆる政治戦線に建設する事業を断固として発展させつづける決意である。全国の労働者人民諸君! とともにたたかわん。

戦投票がそれぞれおこなわれた。選挙には次の九人の候補者が立つた。ミッテラン（社会党）、シラク（共和国連合＝R.P.R.）、バール（フランス民主連合＝UDF）、ルペン（国民戦線＝FN）、ラジヨワニ（共産党）、ベシュテール（緑の党）、ジュカン（元共産党政治局員）、ラギエ（労働者の戦い）、ブッセル（労働者運動）。R.P.R.とUDFは、いずれもブルジョアジーの政党であり、前者は旧ドゴール派で右寄り保守、後者は保守中道とされるFNはいわゆる極右政党、緑の党は

# 大統領選挙の結果

ツテランの任期満了にともなう今回の大統領選挙は、フランス社会が抱える諸問題とフランスの階級情勢をきわめて鮮明に映しだすものとなつた。そしてそれはフランスだけでなく全世界の、とりわけ他の帝国主義諸国のプロレタリアートにも大きな問題を投げかけた。

## 大統領選挙の結果

# 大統領選挙の結果

フランスの大統領は、一八歳以上の有権者の直接投票で選ばれる。一回目の投票で過半数を獲得した候補がいないとき、上位二名の決戦投票が一週間後におこなわれる。今回の選挙では、まず四月二十四日に第一回目の投票が、つづいて五月八日に決戦投票がそれぞれおこなわれた。

選挙には次の九人の候補者が立った。ミッテラン（社会党）、シラク（共和国連合＝R.P.R.）、バール（フランス民主連合＝UDF）、ルペン（国民戦線＝FN）、ラジョワ（共産党）、ベショウテール（碌の

ツテランの任期満了にともなう今  
が抱える諸問題とフランスの階級  
のとなつた。そしてそれはフラン  
西の帝国主義諸国のプロレタリア



大統領再選が決まり支持者たちの  
祝福うけるミッテラン(5月8日)

## 社会党勝利の根柢

今回の選挙結果を保守に対する革  
新的勝利ととらえることはできない。  
ハ一年の大統領選挙ではまだいくら  
かはそうした側面は存在した。「フ  
ランスの変革」を掲げて当選したミ  
テランの初期の政策は「フランス  
左翼の実験」とさえ呼ばれた。しか  
し、この七年間でフランス社会党は  
改良の党から体制擁護の党へと完全  
に転落した。社会党と保守政党の政  
策上の差異もほとんどなくなり、保  
守と革新の対決という図式は過去の  
ものとなつた。ミッテランは今回の  
選挙戦で「フランスの統一（フラン  
ス・ユニ）」を主張し、保守陣営へ  
の浸透をはかつた。ミッテランの勝  
利は、決して「革新」の勝利ではない  
、それは社会党のいつそうのブル  
ジョア政党化によってもたらされた  
ものである。

ミッテラン政権の七年間の軌跡は  
それをはつきりと物語っている。

## 佐井あいみ／桜石

八一年の五月にスタートを切った  
ペテラン政権は、当初は老齢年金と  
児童手当、最低賃金の引き上げ、年  
介の延長、労働時間短縮などの労働  
者・貧民への優遇措置を実施した。

また公共投資を拡大して景気浮揚をはかり、八一年からは大企業・銀行の国有化に着手した。しかしこれらの政策は一年あまりで破産した。八年からは緊縮財政への転換が始まることで、賃金凍結もおこなわれる。八四年にすると鉄鋼・造船・石炭・自動車

佐々木しめく極石

もう一つの今回の選挙のきわだつた特徴は、フランス共産党が大幅に後退し、かわって極右政党・国民戦線（FN）が大きく伸長したことである。

八一年の大統領選で一五・三%、八年の総選挙では九・八%と大幅に支持率を減らしてきた。そして今回それは六・八%にまで落ちこんだ。フランス共産党的地盤沈下は、直接には社会党政権に対する妥協と、一

# 資本主義防衛に走る社会党 移民排斥叫び台頭する右翼

# 三ツテラソ人氣ヒルベシ現象

車などの部門で、産業再編と合理化・人員整理が開始される。経済危機もいつそう深刻化し、失業者も増大した。他方で、核実験続行、中性子爆弾開発、原潜建造などの核軍拡が公然と推進され、また軍需産業の育成と武器輸出の拡大が進められた。対外的には米帝と一定の距離をとおきながら、フランス帝国主義の利害を体現して、南アフリカ政権の容認、レバノン、チャドへの出兵、西ドイツとの軍事同盟関係の強化などが進められた。

こうしたなかでミッテラン政権へ人々の期待は薄れ、八四年末の調

貫した態度の欠如によってみずから生みだしたものである。

彼らは七一年に社会党とのあいだで共同政府綱領に調印し、八一年にミッテラン政権が誕生すると四人の閣僚を送つてこれを支えた。ミッテラン政権による反労働者的政治が次々とうちだされるようになつても、党指導部はミッテラン政権に対する党内外の批判を押圧しつづけた。労働総同盟(CGT)など共産党的支持基盤はこのなかで急速に衰退していった。やっと八四年になって共産党はミッテラン政権批判を開始し、閣僚をひきあげ、八五年の第二五回党大会で社共連合の経験を否定的に総括した。しかしその内容は「党内に待機主義を生み、社会党的共産党弱体化政策を利しただけ」というものであり、社共連合の誤りそのものに本質的なメスを入れるものではなかった。この二五回党大会以降、社共連合への評価をめぐつて党内対立が公然化し、党勢は大きく後退した。社会党政権に対する階級的批判をもたず、労働者大衆をミッテラン政権の抑圧下にさらしつづけ、さらにその誤りを根本的に総括せず、党の威信を台なしにしてしまったこと、ここにフランス共産党の凋落の最大の原因がある。

共産党への支持が低下するのに比例して、極右政党・FNがのしあがってきた。FNは七一年に結成され、ミッテラン政権下で商店主、中小企業者、農民、失業者、下層労働者などの既成政党に対する不満、政治への不信を吸収して勢力を伸ばしてきた。七〇年代には選挙における支持率は一%にも満たなかつたが、八〇年代に入つて一〇%前後の支持率を定着させた。

仏大統領選挙確定得票(内務省発表)	
得票	得票率(%)
ミッテラン候補 (社会党)	16,710,723 54.02
シラク候補 (共和国連合)	14,221,682 45.98



第1回投票で大きく伸長したFNのデモ(5月1日)

#### ミッテラン政権下での経済危機、失業者の増加(二六〇万・一%)

がFNを勢いづけた。FNは「フランス人はフランス人の手に」というスローガンを掲げ、失業問題をはじめフランスのあらゆる社会問題、社会不安の根源が移民労働者にあるといふ排外主義宣伝をくり広げた(フランスにはアラブ諸国や北アフリカからの移民労働者が、その家族を含む約四〇〇万人居住しているとい

## 五年で百億ドルの多国間援助

ということである。それは、国際帝國主義の共同の反革命体制の形成、いわばフィリピン・シフトの公然たる形成にほかならない。

米帝と日帝、西独帝などの主要帝國主義国にとって、前進するフィリピンにおける反帝民族解放・社会主義革命を壊滅させることが一致した第一級の課題として浮上してくる。米帝は、帝国主義国における位置の相対的低下に照応して(また経済的にはますます帝国主義間抗争に勝利的位置を占めつづける日、西独帝国主義への不満をも一因とし

て)、対フィリピン安保経済援助における日、西独両帝國主義の役割分担の増大を要求している。そして日本帝はこのことを十分自覚し積極的にその役割りをひきうけようとしている。帝國主義諸国によるフィリピン革命庄毅にむけた共同反革命体制は、いよいよ直接的で具体的なものになつてきた。

米帝のL-I-W戦略による対NPA戦争を許すな。前進するフィリピン革命運動に連帯し、国際帝國主義の共同反革命介入、対フィリピン・シフトの形成を彈劾せよ。

これらのこと意味するのは、米帝が、日帝、西独帝を中心とした、これに韓国をも含む共同のフィリピンへの反革命介入に「安保経済協力体制」をもって踏みだそうとしている

中 売 発

フ イ リ ピ ニ ン 階 級 戰 爭 と  
わ れ わ れ の 見 解

(お申し込みは大阪戦旗社まで)  
●二〇〇日 ●八八年四月発行

われている)。FNは叫ぶ。「フランスをイスラム国家にしてはならない」「移民を追放すれば失業問題は解決する」。

右翼の台頭は、西欧諸国で同時進行している。西ドイツのネオ・ナチ運動、イギリスの国民戦線、イタリアのMSI(イタリア社会運動)などが現在、活発な動きをおこなつており、フランスでルパン現象とかFN現象といわれる右翼の急速な台頭は、これらの中心に位置している。彼らは西欧単位での連携を強めている。

世界、ソ連からの移住者と、国際共産主義、エイズ、それとテロリズムで共産主義を追放した広大なヨーロッパ帝国をつくらねばならない」「ヨーロッパの敵は四つ。南や第三世界を強める西欧帝国主義の利害は、もっとも右から代弁しようとする主張もある。

# 韓国 総選挙と新しい政局

民正黨慘敗

われている。

さる四月一六日、韓國で第一三回  
国会総選挙がおこなわれた。昨年末  
の大統領選挙で不正行為と両金氏の  
候補一本化失敗によって「圧勝」し  
た盧泰愚政権にとって、今回の総選挙  
は今後の政権基盤を安定させるた  
めに重要なものであつた。韓国资本

主義の発展を土台に「安定の中の民主化」、「国民和解のために独断よりも対話」をうちだし、前全斗煥政権からのイメージ・チェンジをはかるとする盧泰愚と、与党・民主正義党（民政党）の安定多数獲得が大方の予想であった。

数割れ・惨敗となり、反体制色の強い野党・平和民主党（平民党）が躍進して野党第一党となつた。「四・二六大変革」、「選挙革命」と今まで韓国のマスコミは報道し、選挙結果をうけて韓国株式市場は大暴落した。盧泰愚政権は安定化をはたせず、政権危機さえささやかれる事態を迎えた。また光州蜂起八周年と昨年の「六月闘争」一周年を迎えて、さらに韓国プロレタリアート人民はたたかいを高揚させている。

今回の韓國総選挙の評価と、再び激化する韓国階級闘争の発展方向をとらえるなかから、日韓プロレタリアーント人民の階級的連帯を前進させよう。

民正党の安定多数獲得が予測され  
るなかで、総選挙の結果は次のように  
になった。定数二九九議席のうち、  
民正党は一五〇の過半数を大幅に割  
って一二四（旧議席一六〇）、また  
低迷がうわざされていた平民党、新  
民主共和党（共和党）は大幅に議席  
数を伸ばしてそれぞれ七〇（一二四）  
三五（八）となり、統一民主党（民  
主党）は四議席増の五九となつた。  
このような民正党の過半数割れと  
「鮮明野党」の平民党の大躍進、そ  
していわゆる「四党並立」という状  
果には、次のような原因があるとい

野党が躍進

# 議会制支配への転換はかる

# 韓国支配層 ◎他方で労働者階級が急成長



野党第一党への躍進を喜ぶ平民党(4月27日)

新しい課題

が民正党の大敗（得票数一位が百名以上）と平民党の躍進につながったこと。第三には、地域差別・格差という歴史的背景によって、政党指導者のそれぞれの出身地域を支持基盤にして議席獲得となつたこと、などである。

惨敗を喫した盧泰愚は「与党が安定議席なしに国政を円滑に運営していくためには、与野党がすべてに對話と妥協で解決していく成熟した姿勢が重要である」と声明を出し、政治安定に与野協力を訴えた。また米帝・レーガンは「盧太統領への支持は不変」「選挙の結果は民主化の一

候補者は一〇名当選したといわれて  
いる。

全体的には韓国資本主義の發展を  
背景とした政治・社会のブルジョア  
的改革要求が高まりを示す一方で、  
プロレタリアート・農民・都市貧民  
といった革命的な階級の政治要求を  
組織する政治勢力の登場が見られた  
こと、この点が今回の総選挙の大  
きな特徴の一つであった。

光州蜂起八周年、「六月民衆抗  
争」一周年を迎えて、韓国全土で再

シギヨレ民主党、民衆党の登場など  
に示されたように、大きな前進を開  
始している。われわれ日本帝国主義  
足下のプロレタリアート人民は、韓  
国資本主義と米日帝国主義の打倒を  
掲げる韓国プロレタリアート人民の  
目覚ましい政治進出に、支援と連帶  
を組織していく必要がある。

つたことである。残念ながら議席の獲得には至らなかつたが、平民党に加わつた「民族民主勢力圈」出身の

野党第一党への躍進を喜ぶ平民政黨(4月27日)

日帝國主義を倒して民族統一と基層民衆（労働者・農民・都市貧民）の解放をたたかいとうとする「民族民主勢力」が、ハンギヨレ（同じ民族の意）民主党や民衆党といった独自の政党を創出して総選挙をたたか政党である」ことをおさえたうえで韓国ブルジョアジーは、支配安定のために軍事独裁政治から議会制民主主義を以後の人民統治の方策として選択しようとしているのである。これが、今回の総選挙が示したいま一つ

「鮮明野党」を掲げて、労働者・農民の生存権保障、全政治犯釈放、國家保安法などの弾圧法撤廃をうちだして、一定程度の労働者・農民・学生の支持を集めることに成功した。とくに首都ソウルでは、四八議席のうちで一七議席を獲得して第一党となつた。

「つの過程」との見解を発表した。日帝は竹下が「予想外の結果」と語り、外務省も「セマウル疑惑の影響」と与党の敗因をのべ、盧政権支援に全

# 4・26 「連合」に対決し労働者集会開く 十月会議軸にメーデー前夜

# 十月會議軸にメーデー前夜祭 東京

四月二六日、主婦会館において、二〇〇名のたかう労働者を結集して、「連合」に対決し闘うメーデーを「反戦平和労働者集会」が開催された。

この集会は、一〇月会議の呼びかけのもと、東水労青婦部、全国一般南部支部、東京東部労組、自立労連タカラブエ労組関東地協など、計一六団体の労組、活動家団体で構成される実行委員会によつて開催された。主催者あいさつののち、「メーデー

林光氏のピアノの弾き語りをはじ  
た講演がおこなわれた。その後、「  
組法改悪阻止をたたかう仲間、国  
の仲間、在日アジア人労働者の仲間  
からのたたかいの報告が力強くお  
なわされた。

「私達のメーデー宣言」が読みあげられた。宣言では、「連合」と対決しなぬく左派労働者の一大結集が必要なこと、そのためには一〇月会議の強化をおし進めなければならないこと、そしてそのたたかいの重要な一部三反戦平口・国際連帯のことから

いがすえられねばならないこと、な  
どが提起された。最後に林光氏のピ  
アノの伴奏で、全員でインター・ナシ  
ヨナルを力強く齊唱し、集会を終了  
した。

「連合」メーデーがスローガンか  
ら「団結」の用語を削除し、さらに  
「北方領土返還」を掲げるという事  
態のなかで、戦闘的労働者の手で、  
メーデー前夜祭がたたかいとられた  
ことの意義は大きい。このたたかいの  
成果を首都におけるたたかう労働  
者の政治闘争の建設へと、前進させ  
ていこうぜよ。



六団体の労組、活動家団体で構成される実行委員会によって開催された。主催者あいさつののち、「メーデーの歴史と労働者」というテーマで

京都  
解放同盟、労学、市民が共同行動

4  
•  
29

争の街頭情宣と集会・デモが大衆的におこなわれた。天皇制の強化を許さない京都実行委員会の主催によるこの日の行動では、午前中の情宣には四条河原町に約一〇〇名、午後の集会には円山野音に約一五〇〇名の部落大衆、労働者、学生、市民が集まり、今秋の京都国体や迫り来るXデー（天皇ヒロヒトの死）を焦点とした天皇制攻撃との対決をうちあげた。

京都国体を問う京都集会は、主催者を代表しての部落解放同盟京都府連の発言によって始まった。つづいて「今秋の京都国体を利用した『日の丸・君が代』の強制や治安彈圧、「精神障害者」や寄せ場労働者に対する差別的な隔離・狩り込みを許さず、Xマークを口実としての天皇制の強化とたたかおう」との基調が提唱された。次に大阪女子大教員の杉村昌昭氏から「いま天皇制を問う」と

**右翼60がふたたび襲撃**

5・9  
第三回 知花公判 / 沖縄

この日も知花公判闘争の防衛隊をおし進めていく姿勢を示した。

五月九日、知花昌一氏および知花  
盛康氏の第三回公判が那霸地裁でそ  
れぞれおこなわれた。日の丸を焼き  
捨てた知花昌一氏も、またその逃亡  
を助けたとして公務執行妨害罪に問  
われている盛康氏も、事件の背景を  
明らかにし、たたかいの正義性を全  
面的に突きだしていくためには統一  
公判を必要としている。弁護団はこ  
の日、両者の公判において「二つの  
事件は内容的に天皇反対の政治的性  
格を持つ点で同一」として併合申し  
立てを裁判所におこなった。しかし  
裁判官は共通する証人尋問の併合の  
みは認めものの、今後も分離公判

「祖国は人命より重い」　「中越線

が、国体シフトを敷く警察権力の重圧・包围・挑発をはねのけてたたかわれ京都では終日、反天皇制の声が鳴り響いた。

八六年の天皇在位六〇年式典を契機に生みだされた京都での反天皇制闘争は、昨年の天皇一族訪冲阻止闘争をへ、今秋に京都国体をひかえて重大な時期にさしかかっている。部落大衆、労働者、学生、市民の共同行動をさうに前進させ、とりわけ労働者の決起を促進して地域での闘争陣形の発展をかちとり、天皇制攻撃を迎え撃とう。





# フィリピン革命への連帯に フィリピン階級闘

日和見主義的傾向を流入させる結果となる。

## ● 日帝の侵略と反日闘争

スペイン・アメリカにつづいて、フィリピン人民の第三の「解放者」として登場したのは日本帝国主義であった。第一次世界大戦中からフィリピンへの投資を増大させてきた日本は、一九三〇年には、フィリピン遠洋漁業の八〇%を占め、木材・鉱山業への投資をダニー会社をつうじておしそうめいた。こうして、第二次世界大戦前夜にはこれら日本企業を足場とした侵略戦争の準備が本格化していくのである。

一九四一年、「真珠湾攻撃」から破竹の進撃をつづけてきた日本軍はマッカーサーの軍隊を敗北させ、四年一月「アメリカから解放するためにやつてきた」といううたい文句とともにマニラへ上陸した。フィリピンを占領した日本軍はつづいて四年に、フィリピンをアメリカから「解放」して「独立国」とする。当時、東条英樹は次のように語っている。「日本は、フィリピンが日本の利益に」「労働生産物はすべて労働者の利益に」「労働者の解放は労働者自らの手で」は、そのことをしのばせるものである。

米帝の植民地支配は、これら被支配階級のたたかいを消滅させるものでは決してなく、むしろ彼らの困苦は増大し、たたかいの根柢はますます拡大していた。一九二〇年代後半から三〇年代にかけての世界経済の危機は、フィリピンの農民・労働者の生活を破壊し、多くの農民組織や労働組合が一揆やストライキなど戦闘的行動にたちあがつた。労働者のたたかいが前進するにつれて、農民によるコミニテルンを中心とした労働運動・農民運動の国際的な交流が存在していた。

そして、このようなたたかいのなかから、一九三〇年一月、フィリピン共産党が結成された。くわしい歴史は後にゆずるが、結成後二年を経ずして共産党は非合法化され、多くの指導部が逮捕される。一九三八年、反ファシスト「人民戦線」政策にそつて社会党と共産党が合同するが、これは共産党内部にあらわすま

によってフィリピン人民のなかに記憶されている。

しかし、フクバラハップは他方でアメリカへの幻想を捨て去ることができず、アメリカによる独立の願望という限界から自由ではなかった。

共産党の指導という点でみれば、その第一次共産党(CPP)再建にいたる党内闘争ではじめて決着つけられた路線上の誤りから自由ではなかつたのである。

一九四五五年、進攻してきた米軍のマニラ再上陸がはじまつた。日本軍はあっけなく一掃され、フィリピンはその歴史上、四度目の「解放」の次世界大戦前夜にはこれら日本企業を足場とした侵略戦争の準備が本格化していくのである。

一九四一年、「真珠湾攻撃」から

マニラ再上陸がはじまつた。日本軍はあっけなく一掃され、フィリピンはその歴史上、四度目の「解放」の次世界大戦前夜にはこれら日本企業を足場とした侵略戦争の準備が本格化していくのである。

(四) 軍事援助条約

合同米軍事顧問団(JASMA)

G) を通したフィリピン国軍・警察

などへの全面支配。

これ以降、ロハスからマルコスにいたる六代の大統領をカイライとして、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

みせかけの「独立」を与えること

で、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

ことでいったん鎮静化された民族解放闘争は、五〇年代から再生しはじめ、六〇年代にはいってフィリピン軍のベトナム派兵を契機に、反帝・民族解放へと大衆的に前進していく。

そのようななかで、中国革命に鼓舞され、大衆的高揚に支えられてフ

ィリピン共産党内闘争が前進し、

一九六八年、第二次フィリピン共産党が再建された。つづく六九年には、

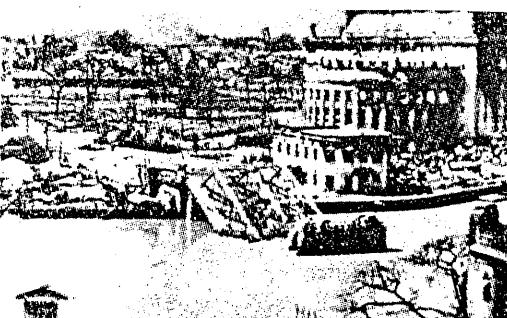
新人民軍が創建され、フィリピン階級闘争は新たな段階を迎える。CP

Pは当面するフィリピン革命の基本

路線を、明確に反帝主義・民族解放・社会主義に定めていくのである。

そして、いまだ記憶に新しいマルコス退放の大衆的決起とアキノ登場以降のすべてのできごとは、この基本

路線の正しさを人民の前にあきらかにし、日々多くの労働者・貧農を反帝民族解放・社会主義革命へと結集させつづけている。



ラ・マニラ市を貫通するパング川の南の光景。戦争の傷あととの生々しさ。

## ● 新植民地支配との闘争

日本軍の支配は、短期間ではあったがスペイン・アメリカと同様に、いや短期間であつたがゆえにより厳しい収奪のもとにフィリピン人民をおいた。

アメリカは当初からフィリピン防衛の意志はなかったといわれ、ヨーロッパでの戦闘のために軍備をひきあげており、首都マニラはまったくの無防備状態におかれていた。この隙間にすりこんだ日本は、可能な限りの収奪をし、抵抗する人民への大弾圧をおこなつた。米軍との最後の戦闘の舞台となつたバターンや、各地の収容所における日本軍の行為は、フィリピン人民のなかに激しい反日闘争とそのための組織を形成させた。四二年三月、共産党の影響のもとに組織されたフクバラハップ(抗日人民軍)がそれである。数年にわたりの英雄的たたかいで、数多くの自己犠牲や献身

が、これは共産党内部にあらわすま

に厳しくフィリピン産品への輸出割当がついた。あわせて、内国民待遇(フィリピン国内でのアメリカ人の経済活動を一〇〇%保証するもの)が定められた。

## (二) 資産法

アメリカ政府、またはその代理人の資産の尊重。

## (三) 軍事基地条約

九年間の米軍基地への特別領土の承認。(一九六六年に改定され一九九一年までとなっている)

## (四) 軍事援助条約

合同米軍事顧問団(JASMA G)を通したフィリピン国軍・警察

などへの全面支配。

これ以降、ロハスからマルコスにいたる六代の大統領をカイライとして、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

ことでいったん鎮静化された民族解放闘争は、五〇年代から再生しはじめ、六〇年代にはいってフィリピン軍のベトナム派兵を契機に、反帝・民族解放へと大衆的に前進していく。

そのようななかで、中国革命に鼓舞され、大衆的高揚に支えられてフ

ィリピン共産党内闘争が前進し、

一九六八年、第二次フィリピン共産党が再建された。つづく六九年には、

新人民軍が創建され、フィリピン階級闘争は新たな段階を迎える。CP

Pは当面するフィリピン革命の基本

路線を、明確に反帝主義・民族解放・社会主義に定めていくのである。

そして、いまだ記憶に新しいマルコス退放の大衆的決起とアキノ登場以降のすべてのできごとは、この基本

路線の正しさを人民の前にあきらかにし、日々多くの労働者・貧農を反帝民族解放・社会主義革命へと結集させつづけている。

代表的なものは次の四つである。

(一) ベル通商法

フィリピン・アメリカ間の無関税貿易を定めたもの。戦前よりもさか

まに輸出割当がついた。あわせて、内国民待遇(フィリピン国内でのアメリカ人の経済活動を一〇〇%保証するもの)

が定められた。

アメリカ政府、またはその代理人の資産の尊重。

九年間の米軍基地への特別領土の承認。(一九六六年に改定され一九九一年までとなっている)

合同米軍事顧問団(JASMA G)を通したフィリピン国軍・警察

などへの全面支配。

これ以降、ロハスからマルコスにいたる六代の大統領をカイライとして、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

ことでいったん鎮静化された民族解放闘争は、五〇年代から再生しはじめ、六〇年代にはいってフィリピン軍のベトナム派兵を契機に、反帝・民族解放へと大衆的に前進していく。

そのようななかで、中国革命に鼓舞され、大衆的高揚に支えられてフ

ィリピン共産党内闘争が前進し、

一九六八年、第二次フィリピン共産党が再建された。つづく六九年には、

新人民軍が創建され、フィリピン階級闘争は新たな段階を迎える。CP

Pは当面するフィリピン革命の基本

路線を、明確に反帝主義・民族解放・社会主義に定めていくのである。

そして、いまだ記憶に新しいマルコス退放の大衆的決起とアキノ登場以降のすべてのできごとは、この基本

路線の正しさを人民の前にあきらかにし、日々多くの労働者・貧農を反帝民族解放・社会主義革命へと結集させつづけている。

代表的なものは次の四つである。

(一) ベル通商法

フィリピン・アメリカ間の無関税貿易を定めたもの。戦前よりもさか

まに輸出割当がついた。あわせて、内国民待遇(フィリピン国内でのアメリカ人の経済活動を一〇〇%保証するもの)

が定められた。

アメリカ政府、またはその代理人の資産の尊重。

九年間の米軍基地への特別領土の承認。(一九六六年に改定され一九九一年までとなっている)

合同米軍事顧問団(JASMA G)を通したフィリピン国軍・警察

などへの全面支配。

これ以降、ロハスからマルコスにいたる六代の大統領をカイライとして、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

ことでいったん鎮静化された民族解放闘争は、五〇年代から再生しはじめ、六〇年代にはいってフィリピン軍のベトナム派兵を契機に、反帝・民族解放へと大衆的に前進していく。

そのようななかで、中国革命に鼓舞され、大衆的高揚に支えられてフ

ィリピン共産党内闘争が前進し、

一九六八年、第二次フィリピン共産党が再建された。つづく六九年には、

新人民軍が創建され、フィリピン階級闘争は新たな段階を迎える。CP

Pは当面するフィリピン革命の基本

路線を、明確に反帝主義・民族解放・社会主義に定めていくのである。

そして、いまだ記憶に新しいマルコス退放の大衆的決起とアキノ登場以降のすべてのできごとは、この基本

路線の正しさを人民の前にあきらかにし、日々多くの労働者・貧農を反帝民族解放・社会主義革命へと結集させつづけている。

代表的なものは次の四つである。

(一) ベル通商法

フィリピン・アメリカ間の無関税貿易を定めたもの。戦前よりもさか

まに輸出割当がついた。あわせて、内国民待遇(フィリピン国内でのアメリカ人の経済活動を一〇〇%保証するもの)

が定められた。

アメリカ政府、またはその代理人の資産の尊重。

九年間の米軍基地への特別領土の承認。(一九六六年に改定され一九九一年までとなっている)

合同米軍事顧問団(JASMA G)を通したフィリピン国軍・警察

などへの全面支配。

これ以降、ロハスからマルコスにいたる六代の大統領をカイライとして、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

ことでいったん鎮静化された民族解放闘争は、五〇年代から再生しはじめ、六〇年代にはいってフィリピン軍のベトナム派兵を契機に、反帝・民族解放へと大衆的に前進していく。

そのようななかで、中国革命に鼓舞され、大衆的高揚に支えられてフ

ィリピン共産党内闘争が前進し、

一九六八年、第二次フィリピン共産党が再建された。つづく六九年には、

新人民軍が創建され、フィリピン階級闘争は新たな段階を迎える。CP

Pは当面するフィリピン革命の基本

路線を、明確に反帝主義・民族解放・社会主義に定めていくのである。

そして、いまだ記憶に新しいマルコス退放の大衆的決起とアキノ登場以降のすべてのできごとは、この基本

路線の正しさを人民の前にあきらかにし、日々多くの労働者・貧農を反帝民族解放・社会主義革命へと結集させつづけている。

代表的なものは次の四つである。

(一) ベル通商法

フィリピン・アメリカ間の無関税貿易を定めたもの。戦前よりもさか

まに輸出割当がついた。あわせて、内国民待遇(フィリピン国内でのアメリカ人の経済活動を一〇〇%保証するもの)

が定められた。

アメリカ政府、またはその代理人の資産の尊重。

九年間の米軍基地への特別領土の承認。(一九六六年に改定され一九九一年までとなっている)

合同米軍事顧問団(JASMA G)を通したフィリピン国軍・警察

などへの全面支配。

これ以降、ロハスからマルコスにいたる六代の大統領をカイライとして、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

ことでいったん鎮静化された民族解放闘争は、五〇年代から再生しはじめ、六〇年代にはいってフィリピン軍のベトナム派兵を契機に、反帝・民族解放へと大衆的に前進していく。

そのようななかで、中国革命に鼓舞され、大衆的高揚に支えられてフ

ィリピン共産党内闘争が前進し、

一九六八年、第二次フィリピン共産党が再建された。つづく六九年には、

新人民軍が創建され、フィリピン階級闘争は新たな段階を迎える。CP

Pは当面するフィリピン革命の基本

路線を、明確に反帝主義・民族解放・社会主義に定めていくのである。

そして、いまだ記憶に新しいマルコス退放の大衆的決起とアキノ登場以降のすべてのできごとは、この基本

路線の正しさを人民の前にあきらかにし、日々多くの労働者・貧農を反帝民族解放・社会主義革命へと結集させつづけている。

代表的なものは次の四つである。

(一) ベル通商法

フィリピン・アメリカ間の無関税貿易を定めたもの。戦前よりもさか

まに輸出割当がついた。あわせて、内国民待遇(フィリピン国内でのアメリカ人の経済活動を一〇〇%保証するもの)

が定められた。

アメリカ政府、またはその代理人の資産の尊重。

九年間の米軍基地への特別領土の承認。(一九六六年に改定され一九九一年までとなっている)

合同米軍事顧問団(JASMA G)を通したフィリピン国軍・警察

などへの全面支配。

これ以降、ロハスからマルコスにいたる六代の大統領をカイライとして、新植民地主義支配は強化の一途をたどっていく。

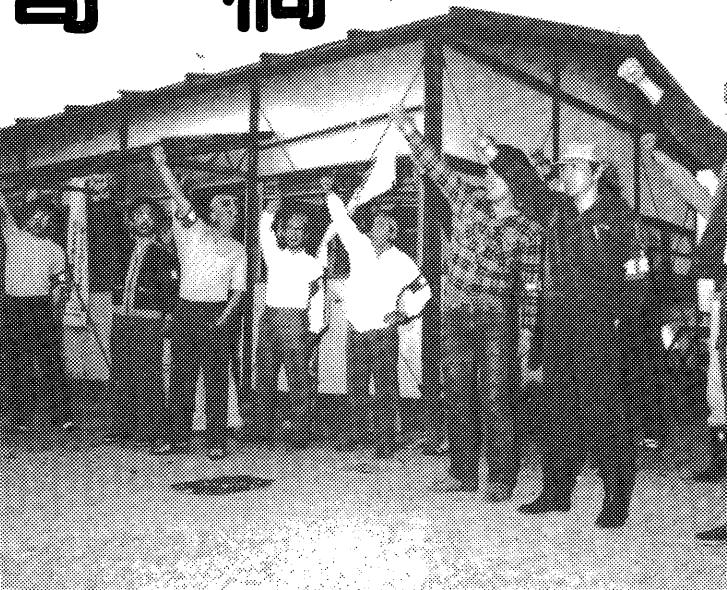
ことでいったん鎮静化された民族解放闘争は、五〇年代から再生しはじめ、六〇年代にはいってフィリピン軍のベトナム派兵を契機に、反帝・民族解放へと大衆的に前進していく。

そのようななかで、中国革命に鼓舞され、大衆的高揚に支えられてフ

</

京都の洛南合同労働組合が、結成から5年を迎えた。組合員の多くは自治体委託企業の清掃労働者であり、現在、下水道転換事業が進行するなかで、労働組合は深刻な雇用問題に直面している。組合の活動家の方に、これから展望を書いていただいた。(編集局)

# 寄稿



洛南合同労組堂坂支部のはじめての争議(83年5月)

## 見えてきた本当の敵

### 意味深い運動にするために

我々の労働組合、洛南合同労働組合が旗あげてから五年が過ぎた。そこで、烽火を編集する人から「洛南合同労組の五年間を振り返って運動の総括を書いてもらえませんか」と言われた。私は「ああ、いいですよ」と答えた。答えた後で私は困ったなど後悔した。

私はこの五年間「ああでもない、こうでもない」と難波しながら活動を続けてきたにすぎない。それほど当惑するもの多かったのだ。しかし、その繰り返しでもあった。これは現在に至っても変わらない。とても、これらの運動を整理し総括する、そして今後の発展方向を紡ぎ出すことなどできない、これが私の率直な心境である。

しかし一方で私は、私達の直面した感した問題は私達のような労働者に共通するものだとも思う。ここで言う私達のような労働者とは、比較的安く買いたいが、何がしかの差別すら受ける職業についている労働者といふほどの意味である。下層清掃労働者という言葉で表される労働者なのかもしれない。

ここで少し枝葉にはいるが、私は下層清掃労働者という言葉が好きにな

れない。「私はあの下層清掃労働者です」などと大見えを切るほどの気高さを持ち合わせていないからだ

合労の闘いは私にとって未経験で、当惑するもの多かった。それはどうもいるのか」「世の中とはこんなものか」という驚きと戸惑いであった。無法で非倫理的、利己主義の手前任で理解を越える行動原理を持つ、それらの人々がきしみながら眼前を通して、通過する、通過しながら生み出す無理難題(真にそれは無理難題であつた)に途方に暮れながらも取り組む、そんな五年間であった。それらを雜ぱくに拾いだしてみたい。

人生を考え世の中を考えるという人生を考へる人々の中をみると、彼らの生き方とか暮らしとかに、自らの生き方とか暮らしとかに

ならない。「私はあの下層清掃労働者です」などと大見えを切るほどの気高さを持ち合わせていないからだ

合労の闘いは私にとって未経験で、当惑するもの多かった。それはどうもいるのか」「世の中とはこんなものか」という驚きと戸惑いであった。无法で非倫理的、利己主義の手前任で理解を越える行動原理を持つ、それらの人々がきしみながら眼前を通して、通過する、通過しながら生み出す無理難題(真にそれは無理難題であつた)に途方に暮れながらも取り組む、そんな五年間であった。それらを雜ぱくに拾いだしてみたい。

人生を考え世の中を考えるという人生を考へる人々の中をみると、彼らの生き方とか暮らしとかに、自らの生き方とか暮らしとかに

ろう。下層であること、人のいやがる汚く(本当に汚いかは置く)、臭い仕事につくことを私は望まないし、私と一緒に働く労働者も望まないだろう。ただ食うためにしている仕事をある。他人から「君達はし尿収集という差別される仕事につかざるをえない下層労働者ですよ」と言われても不機嫌に「あーそうですか」と応えるだけである。

我々は「少しでも金が上がれば良い」「オヤジにどなりつけられるのはかなわん」、それぐらいの気持ちで組合を結成したと書いた。

組合を結成して驚いたことが幾つかある。組織した労働者について、

オヤジ(経営者)について、行政当局、自治体の首長について、それらは私にあたかも別世界の人々、別世界の出来事との遭遇という印象すら抱かせた。簡潔に表せば「こんな人もいるのか」「世の中とはこんなものか」という驚きと戸惑いであった。

無法で非倫理的、利己主義の手前任で理解を越える行動原理を持つ、それらの人々がきしみながら眼前を通して、通過する、通過しながら生み出す無理難題(真にそれは無理難題であつた)に途方に暮れながらも取り組む、そんな五年間であった。それらを雜ぱくに拾いだしてみたい。

人生を考え世の中を考えるという

いすれにしても我々の五年間の経験は、我々と同じような労働者にとって意味のある運動であると確信する。この一文が我々のような労働者にとってわずかでも意味を持てば幸いである。

だからこそこの稚拙な文書を「ウンウンうなりながら」綴ったのである。この一文が我々のような労働者にとって意味のある運動にしなければならないとも願つ。

いずれにしても我々の五年間の経験は、我々と同じような労働者にとって意味のある運動であると確信する。この一文が我々のような労働者にとって意味のある運動であると確信する。この一文が我々のような労働者にとって意味のある運動であると確信する。この一文が我々のような労働者にとって意味のある運動であると確信する。

### 甘すぎたわれわれの見通し

先ほど私は「少しでも金が上がりたい」「オヤジに怒鳴りつけられるのはかなわん」、それぐらいの気持ちで組合を結成したと書いた。組合を結成して驚いたことが幾つかある。組織した労働者について、オヤジ(経営者)について、行政当局、自治体の首長について、それらは私にあたかも別世界の人々、別世界の出来事との遭遇という印象すら抱かせた。簡潔に表せば「こんな人もいるのか」「世の中とはこんなものか」という驚きと戸惑いであった。

無法で非倫理的、利己主義の手前任で理解を越える行動原理を持つ、

それらの人々がきしみながら眼前を通して、通過する、通過しながら生み出す無理難題(真にそれは無理難題であつた)に途方に暮れながらも取り組む、

そんな五年間であった。それらを雜ぱくに拾いだしてみたい。

人生を考え世の中を考えるという

正面から立ち向かう(これこそ生命力と呼ぶものの本質だと私は考えるが)、そんな生命力をすっかり奪われた労働者(もつとも我が家ニッポン国の大半はこれに当たる)が委託労働者である。残念ながら五年の経験から私はそう判断する。

委託労働者は正面から物事を解決しようとしている。たとえて言えば、賃上げを希望しても労働組合に結集しない。オヤジにゴマをするか、オヤジに告げ口をして賃金を上げてもやうとする。これは乱暴に過ぎる例示かも知れない。しかしいかに極端であっても委託労働者の一つの行動様式である。

もちろん彼らがここに至るには実にしっかりした理由がある。

彼らが委託労働者の団結を信じ得ないと確信するに至るのは、委託労働者の組合が幾度も潰えた実事を見つけてからである。たまさか委託労働者が団結しても、自らが強いられる運命からは逃れ得ないという事実を見たからである。

我々の組合でも、解雇撤回を求める争議中の委員長が勝手に会社と和解して逃げたことがあった。たった百万円ほどの金が目当てでオヤジと和解した(彼は当時、金に詰まっていた)。逆にいうと我々の組合は百万円ほどの金すら用意できなかったのだ。

葬儀費用をオヤジに借りるために組合を脱退した者もあった。悲しいというかもう少し大きな組合なら何とかできたのかもしれない。でも高々二〇数名の我々の組合では無理な

相談であった。こんな例は枚挙にいとまがない。

もちろん労組員の生活指導、あるいは組合自治の原則を確立すべきであること、また会社の不当性、支配介入を厳しく糾弾すべきであることは言を待たない。

しかし委託労働者の携える生活の放らつと、委託經營者の違法な労組弾圧は、我々が委託労働者を組織し戦略戦術を策定すると織り込むべき性質のものであった。この点に関して我々の見通しは甘すぎたと断ぜざるえない。だからこそ何か問題が起きると後手後手の対応をせざるをえなかつた。というより委託労働者が表すあれこれに、直面しつつ當

感することの連続であった。

いずれにしても洛南合同労組もまた従前の委託労組に等しく、委託労働者にとって未だ信頼するにたる労働組合とはなっていないという事実が残つた。

団結したらできることも、団結しないからできない。団結しない原因は、団結してもできないから。これが現在の委託労働者の団結の質である。この団結の質に対して「だからこそ強固な組織を建設しよう!」といふのは立派で無責任なお題目にならぬない。我々が幾度も団結しては潰えてきたのには、実にしつかりした理由があるからである。

## 労組結成で労資関係が逆転

我々の職場は人の入れ替わりが多い。平均勤続年数は四年から五年

というところであろうか。

我々には「この仕事はいつまでも続ける仕事ではない」という脅迫観念が絶えず付きまとつてゐる。それが何かの契機、子供が成長して親の仕事を理解するようになつたのだ、兄弟の結婚話だの、職場で面白くなつことがあつただの、そんな契機があれば実にあつさり辞めていく。

賃金の払われ方について、人のいやがる仕事だから初任給は高い、しかし数年後には頭打ちになるというものである。またそうでなければオヤジも経営できない。初任給も高く、その後の賃上げもどんどんしなければならないのでは、会社も苦しかろう（別に私が心配する事柄ではないが）。

誰が勤めてもそこそここの金にはなる。「汚い仕事が当座しのぎに勤める」、そして「いつでも辞められる」、そんな会社でもある。とにかくにも実にあつさり辞めては次々と新しい人が入つてくる。こんな風に労働者が入れ替わる職場では組合員が絶えず減っていく危険がある。

「労働組合のためにこの仕事を続けます」という労働者はごくわずかである。そんな労働者を対象に組織を維持することはできない。となると次々と入つてくる労働者を限りなく組織化しなければ労組は少数化する。しかし組織化がなかなか追いつかない現実がある。

事業主の声は正直なものである。

とにかくそんな風に差別にさいな

まれながら、オヤジ自らが肥え汲みをするところから始めた。そして一

た従前の委託労組に等しく、委託労働者にとって未だ信頼するにたる労働組合とはなっていないという事実が残つた。

安定する。

残念ながらし尿収集という業種につく労働者は、前述したとく初任給にひかれ入社する者が多い。そして四年から五年で移り替わる。中に

は会社の物品に手をつける者やオヤジに借金をして踏み倒す者もあった。

オヤジはそんな労働者に応じた労務管理（労働者を信用せずアメとムチで使い捨てる）をいつしか覚えるようになる。

そんな企業に労働組合が結成される。労組は「それ行け、やれ行け」と労働条件を引き上げようとする。

当然ながらその要求はオヤジの許容範囲（この程度なら出そう）を越える。往々にして組合が強いと組合員は、それまでのうっごん晴らしもあって野放図な行状に及びがちである。

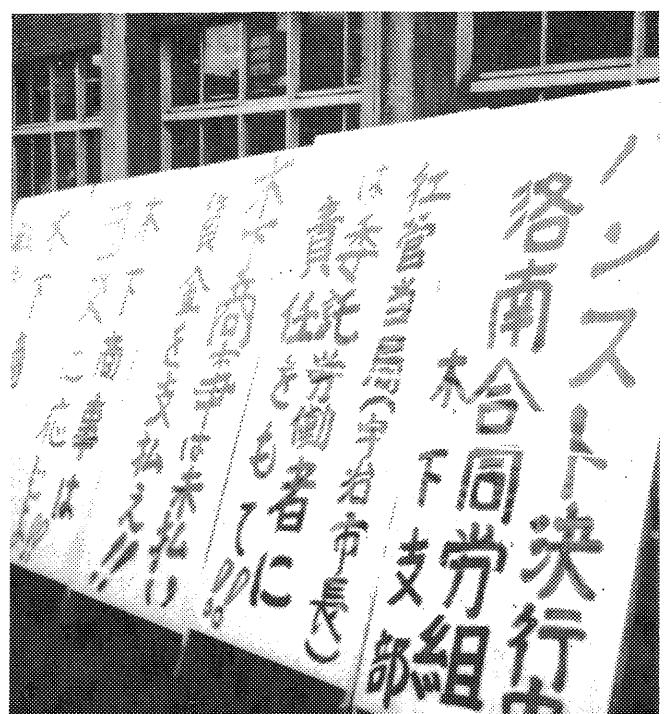
一方で行政は昔も今も無責任であつたらしく、業者にし尿を集めさせても処理には煩被りする。そこで仕事としてきた。団体交渉で「世間で一番汚い仕事だと思うります」とオヤジが率直に答えたこともある。

オヤジもまた強い差別を実感してきたことだろう。

一方で行政は昔も今も無責任であつたらしく、業者にし尿を集めさせても処理には煩被りする。そこで仕事としてきた。団体交渉で「世間で一番汚い仕事だと思うります」とオヤジが率直に答えたことがある。

オヤジもまた強い差別を実感してきたことだろう。

一方で行政は昔も今も無責任であつたらしく、業者にし尿を集めさせても処理には煩被りする。そこで仕事としてきた。団体交渉で「世間で一番汚い仕事だと思うります」とオヤジが率直に答えたことがある。



宇治市長に抗議して市役所前でハンスト(84年5月)

## 労組つぶしを看過する行政

うかつな私は当初、法律を破るような企業に行政はなぜ事業を委託するのかと素朴な疑問を持った。

言つまでもなく労働組合は非法的組織ではない。企業もまた合法組織である。法律という枠内で労組、企

ねた業者の強い要請で建設されたという経過すらある。「ワシらは経営者とは言つても、実際は行政に雇われているようなものだ」という委託

組織ではない。企業もまた合法組織である。法律という枠内で労組、企

ねた業者の強い要請で建設されたという経過すらある。「ワシらは経営者とも交渉をする。また争議をする。

もちろん現行の法律に異議を唱える企業とも交渉をする。また争議をする。

もちろん現行の法律に異議を唱える経営者も労働者もあるろう。法律も運用に際しては微妙な解釈を伴うし、法は時代に洗われるべきでもあろう。

しかし委託企業の不当労働行為はこられない。「法律は権力の魔法の杖」と書いた。我々はすでに地方委で三件の救済命令を勝ち取っている。

その都度に行政当局に委託企業を指導するように申し入れた。しかし梨

らかにする。我々はすでに地方委で三件の救済命令を勝ち取っている。

行政の委託企業におけるあからさまな法律違反、不当労働行為をいくら下卑た首長でも肯定しまいとの判断を私はする。

当局が素知らぬ顔をするのには別の  
重い理由がある。

行政当局の委託企業への指導責任  
放棄の根本原因は、彼らの清掃事業  
に対する姿勢によるものである。委  
託企業及び委託労働者に対する行政  
当局の対応を決定するのは、行政當  
局の清掃行政の位置づけからくるも  
のであると私は推断する。

清掃事業は自治体固有の業務であ  
ると法（地方自治法、廃棄物の処理  
及び清掃に関する法律）に明記して  
ある。地方自治体は不承不承でもこ  
れを行わなければならない。住民の  
し尿を住民から苦情の起ららないよ  
うに、できれば住民の目に触れぬよ  
うに隠密に処理したい、そのためには  
は委託料の無駄金（純粹に住民サー  
ビスに使われているのではない）も  
法律破りも認めます、これが委託企  
業の違法な労組賛成を看過する行政  
当局の本音ではないのか。

住民のし尿は誰かに処理させなけ  
ればならない。し尿収集をおこなう  
のは「あんな違法行為をして私財を  
蓄える経営者」と「あんな会社で汲  
み取りをする労働者」が代行するこ  
とが適している。もつとあからさま  
に表現すれば、「あんな企業とあん  
な労働者に適した」清掃事業として  
行政当局は位置づけていると私は考  
える。

し尿収集の企業と労働者は住民生  
活のために存在している、はつきり  
言えばそのためにのみ存在している。  
しかし下水道が普及すれば「あんな  
企業とあんな労働者」は不要になる。  
我々の地域では現在、下水道の整備  
として共産主義前衛党の建設をか  
から再建していくこと、その主体  
で、わが国の階級闘争をその基礎  
闘争構造の瓦解という情勢のなか  
から再建していくこと、その主体  
として共産主義前衛党の建設をか

が進められている。すでに人口比で  
一割が下水道へ転換している。いず  
れはし尿収集という委託事業は消滅  
する。これは逃れようのない現実で  
ある。

この現実の前で首長は語った。  
「業者はこれまで十分に儲けられた  
でしょう。企業経営には良い時も悪  
い時もあります。悪い時は悪い時な  
りに自力でしのぐというのが経営者  
でしょ。委託企業への事業補償は  
一切考えておりません」と。

これまでし尿収集をしてきた業者  
には補償はしない、ましてこれまで  
し尿収集をしてきた委託労働者の暮  
らしなどは念頭にないというところ  
だろう。

地方自治法（第二条）並びに廃棄  
物の処理及び清掃に関する法律（第  
六条）には、し尿の処理は自治体の  
義務であり、固有の業務であると明  
記されている。法の趣旨に照らせば、  
し尿処理は住民の暮らしを支える最  
も基本的な行政サービスとして、だ  
からこそ自治体が無料で直接行うべ  
き性質の事業となる。

**烽火の定期購読をお願いします**

○郵送(密封)10回分……3000円  
20回分……5000円  
(お申し込みは大阪戦旗社まで)

その事業を代行してきた委託の業  
者、労働者を、一方的な政策変更  
(下水道転換)によって、何の補償  
もなく放り出すなど到底許されるも  
のではない。

烽火の定期購読をお願いします

# 烽火

たたかいの鮮明な指針を提起する政治新聞

取り扱い書店

- 北海道／ひらひら(札幌市北区) ●東京／明治大学生協(東京都千代田区)、模索舎(同・新宿区)、吉祥寺ウニタ(同・武蔵野市)
- 神奈川／ルビコン書房(川崎市中原区) ●愛知／名古屋ウニタ(名古屋市千種区) ●京都／オデッサ書房(京都市左京区) ●大阪／大阪ウニタ(大阪市天王寺区)、大阪市立大学生協(同・住吉区)、三鈴書林(同・北区)、関西大学生協(大阪府吹田市) ●兵庫／神戸大学生協(神戸市灘区) ●福岡／九州大学生協(福岡市中央区)

# 夏期カンパを訴える

## 清掃労働者の魂叩きつける

我々は労働組合結成時、求心的  
に企業内の経済闘争、人権闘争に埋  
没していた。しかし我々が「闘え  
ば取れる」から「闘っても取れない  
」という現実に気付くには、ほ  
ぼ一年の歳月で十分であった。  
一方で我々は己が内側から肉が削  
げ落ちるような痛みと哀しみを感じ  
ながら、我々の元を去っていく仲間  
抗しえないもつと大きな敵であろう。

□ ■ □

おわりに、インドの作家T・S・  
ピライの「清掃夫の息子」(山際素  
男訳)の一節をすべての清掃労働  
者に呈したい。

全ての家の便所をきれいにするの  
は大変な仕事なのだ。が、仕事を全  
うすると人々は清掃夫のことなどき  
れいに忘れてしまう。臭いにおいが  
家の中まで漂ってきた時だけ清掃夫  
という存在は人々の記憶に蘇ってくる。  
清掃夫という存在はそれ故立派な  
社会的存在であり、人々に否応ない  
影響力を持っているのだ。しかしチ  
ュラダにはその力の所在が本当には  
つかめていなかつた。

**共産主義者同盟**  
(全国委員会)

(了)